



天使の笑顔が見たいから。
クラウンになった、ひとりの若者の物語。

vol.1 クラウンとの出会い



玉井良平 Ryohei Tamai

短大卒業後、2004年にオーストラリアでクラウン（道化師）に出会う。帰国後、保育園に勤務する傍ら、子どもたちの創造力の向上を目指してクラウンを学んでもらう、キッズクラウン講座を立ち上げる。10年にカナダに渡り、日系の子ども達を対象に行なった同講座も好評。今回、クラウンを通して得た体験を初めて執筆。日本のキッズクラウン達を連れて、カナダで海外公演をする事が新たな夢となっている。
www.child-entertainment.net

ふと、街外れの閑静な住宅街で、その風景には不釣り合いな色鮮やかなマジックショップが目にとまった。窓から中を覗き込むと子どもたちが楽しそうに道化師と遊んでいた。日本では俗にピエロと呼ばれる存在だが、欧米では「クラウン」と呼ぶことを後から知った。気がつく、僕は引き込まれるようにして店の扉を開けていた。「キキ」という名のキラキラした目の女性クラウンが僕を笑顔で迎えてくれた。オーストラリアのメルボルンでの出来事だった。

短大を出てすぐ、地元の保育園に就職した。「男性保育士」というちょっと変わった職業に抵抗は無かった。僕が子ども時代に担任だった先生もまた、当時は「保父」と呼ばれ、今よりももっと珍しかった男性保育士だったからだ――。

ところが、いざ自分が保育園の先生になってみると、現実はまだ違っていた。子どもが言うことを聞いてくれない。近づくとも泣かれる。言われた仕事に時間が掛かりすぎる…。「あれもできる」「これもできる」と大口を叩いて採用してもらったのに、自分が本当に情けなかった。

3か月後、僕は保育園に辞表を提出した。それからは何をやってもダメだった。2年後、僕は履歴書に書く職歴が枠内に書ききれない事に気が

づき、愕然とした。そんな中、神戸で外国人の子ども対象の保育ボランティアをしている時に、ある女性から声をかけられた。「玉井君は日本より外国向きだよ。オーストラリアに行ってみれば？」海外に視野が広がった瞬間、僕の腹は自然と決まった。

キキと出会ってから、定期的に僕はそのマジックショップに入り込むようになっていた。キキからマジックを教わるのは楽しかった。「マジック」にちょっとした思い入れがあるからかもしれない。何をやってもうまくいかなかった保育士時代に、「ロープが棒になる」というマジックを子どもに見せたところ、子どもがとても喜んだという嬉しい経験が僕にはあった。キキの教えは単純にして明快なものだった。「Show the Respect」（敬意を示せ）子どもに対して、大人に対して、全てのものに対して敬意を払う事を意識した。自然と笑顔が増えていった。仕事も見つかり、玩具のセールスを始めた。現地では「Door to Door」と呼ばれる収入は完全歩合制の厳しい仕事だったが、Show the Respect 精神で1軒1軒大切に回り、丁寧に話をすることを心がけた。

すると、いろんな優しさに気づかされた。邪険にされることも多かったが、汗をかきながら営業をしている

と1杯のオレンジジュースを持ってきてくれたり、「クラウンになる」という夢を話したら、カルボナーラをご馳走してくれたお店もあった。何より、職場の仲間が僕を支えてくれた。一緒に遊びに行き、たくさん笑い合った。Show the Respect 精神が色んな場所でも役に立った。3か月後、僕の営業成績は20人抜きを達成した。

そして、たくさんの自信を手に入れた。オーストラリアから帰国。保育現場に再チャレンジしてみた。それとともに地域で子どもたちに「どうすればクラウンになれるのか？」を教えるキッズクラウン講座というものを始めてみた。「先生」という敬称に堅苦しさを感じていたので、ここでは「タマちゃん」と名乗った。親でも先生でもない「第三の大人」として、自分の居場所を創りたかった――。



*コラム『バイリンガルで育てる』は前回で終了致しました。ご愛読ありがとうございました。